

第7回「宗教と環境シンポジウム」に参加

佐藤孝則

2016年12月10日、龍谷大学深草キャンパスで開催された標記シンポジウムに参加した。これは宗教・研究者エコイニシアティブ (RSE) が主催し、龍谷大学・龍谷大学世界仏教文化研究センターが後援するシンポジウムだった (図1)。このシリーズの第3回シンポジウムは、2012年11月10日、おやさとやかた南右第二棟 (陽気ホール) で、RSE 主催、東洋大学国際哲学研究センター共催、奈良県宗教者フォーラム・天理大学・天理大学おやさと研究所が後援して開催された。



図1. シンポジウムの案内チラシを一部抜粋したもの。写真には、龍谷大学深草キャンパス2号棟の屋上に、太陽光パネルが設置されているのを見ることができる。

今回のシンポジウムでは、RSE 代表の竹村牧男東洋大学長と開催校代表の赤松徹真龍谷大

学長が開会の挨拶をし、続いて松居竜五龍谷大学国際学部教授が、「マンドラと生態系 —南方熊楠の仏教理解と環境思想—」と題して基調講演をおこなった。

そして、2011年、全国の大学では初めてといわれる「環境宣言」を発表した龍谷大学の環境対策事例として、「メガソーラー建設」と題した同大学政策学部の深尾昌峰准教授と、「龍谷大学での地球温暖化防止の取組」と題した同大学同学部の北側秀樹教授による発表が続いた。

またパネル発表では、最初に同大学国際学部の嵩満也教授が「エコロジー、共生思想そして仏教」と題して、2番目に同大学農学部の玉井鉄宗助教が「大谷光瑞と立体農法」と題して、3番目には RSE の竹村代表が「環境問題とライフスタイルの転換—仏教の視点から—」と題して登壇した。続くパネル討論では、発表した3名のほか、基調講演をおこなった松居教授が加わって、今回のメインテーマである「環境への永遠の願いと仏教」について議論を交わした。モデレーターを同大学・農学部の杉岡孝紀教授が務めた (図2)。

基調講演で、松居教授は冒頭に、来年 (2017年) は南方熊楠生誕150年を迎える年であることを述べ、彼は真言僧・土宜法龍との交流によって大乘仏教を学び、その発想を用いて西洋近代の学問の限界を乗り越えようとしていたこと、また「南方マンドラ」の発想はその試みの一つで、紀伊半島での生物調査を経て独自の環



図2. パネル討論のようす。

境思想を生み出したのではないかと紹介した。『nature』誌に日本人で初めて論文を発表した南方熊楠の、自然科学と宗教との接点を論考する貴重な講演内容だった。

龍谷大学の環境対策事例の内容では、深尾准教授 (NPO 法人 京都コミュニティ放送理事長を兼務) は最初に、同大学の深草キャンパス2号棟屋上に太陽光パネルが設置されていることを強調した。そして同大学が、「社会的投資」として、日本の大学で初めてとなる地域貢献型発電所事業、「龍谷ソーラーパーク」の取り組みを、総額7億2,000万円を投じて展開したと述べた。

この「ソーラーパーク」は、1号機を2013年11月に和歌山県印南町に、また2号機を2016年2月に三重県鈴鹿市に設置し、この2カ所で約6,250,000kWhの発電を可能にした。この発電量は、同大学で使用する年間消費電力の約62%をまかなうという。まさにエネルギーを地産地消し、地球温暖化を促す二酸化炭素のオフセット効果を十分に果たしたことになる。しかもこの「ソーラーパーク」は、非営利型株式会社 (株式会社 PLUS SOCIAL) が運営の主体となり、利潤を社会課題の解決に取り組む市民公益活動の支援資金に充てている。すなわち、これが「社会的投資」である。

龍谷大学の「ソーラーパーク」の取り組みは、産・官・学・民・金 (金融機関) が協働して実施する「一手一つ」の姿ではないかと考える。

環境対策の二つ目の事例として、北川教授 (NPO 法人 環境保全ネットワーク京都代表理事を兼務) は、同大学のエコキャンパス化の実現に向けた取り組みを紹介し、特に学内のごみの減量化とごみ組成調査を進め、課題の洗い直しをおこなっていることを紹介した。また、「学内で発生する二酸化炭素量を10年間で1%減量させる」という目標を、たった1年間で10%減少させた実績を報告した。学内が「一手一つ」になれば、目標を十分に達成させられるという自信につながったと述べた。

そのほかパネル発表では、嵩教授は、環境問題に対する警鐘が鳴らされるようになって50年以上になるが、宗教とりわけ仏教はどのように関わってきただろうかと問い直し、科学万能主義、物質・経済至上主義、人間中心主義の視点から問題を提起し、「共生 (ともいき)」の思想を再評価した。そして、環境問題は「環境」の問題ではなく、「人間」の問題だと述べた。次に玉井助教は、宗教家であり探検家である大谷光瑞が『熱帯農業』を著したことを評価し、低環境不可能業の「立体農法」について言及した。

そしてパネル発表最後の竹村 RSE 代表は、宗教と倫理の問題、仏教の戒律の意味、日本仏教と戒律、日本仏教における戒律復興運動、現代の大乘仏教徒の生活方針、そして最後にまとめとして、新大乘戒と環境問題について言及した。特に、宗教と道徳は同一ではない、と強調した。そして、「ディープエコロジー」運動についても前向きに述べた。

今回のシンポジウムでは、RSE が取り組む四つの方針、①科学技術による解決、②社会システムによる解決、③ライフスタイルの転換による解決、④人間観・世界観による解決に基づく議論が展開された。